

サウンドスケープと平和研究（中間報告）

半澤 朝彦

上半期

本プロジェクトの2年目であるが、前年度末から始まった新型コロナウイルスの感染拡大により、本研究の遂行に深刻な影響が生じた。上半期は、この困難な状況にいかに対応するかという課題への対処を強いられた。

本プロジェクトは、国際学における音楽や環境音の役割・位置づけを政治学・平和学のフレームを用いて学際的に探り、国際的な調査を行うとともに、継続的な地域社会への貢献や教育へのフィードバックを行うことを目的としている。そのため、本年度には、海外調査、学会報告、シンポジウム、イベント、レクチャコンサート開催などを予定していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、海外はもちろん、国内の往来もかなり規制され、感染者の多い首都圏在住の研究者がフィールド調査のために移動することが難しい情勢が続くことになった。また、オンライン以外の大規模なシンポジウム・イベント・レクチャコンサートなどの開催は、感染拡大リスクを避けるため事実上不可能なまま、来年度以降にかけての見通しも楽観を許さない状況である。

こうした状況を受けて、本研究予算の2021年度への一部繰り越し（ないしそれに相当する代替措置）および、本年度・次年度研究計画の修正（本研究にかかわる出版作業、論文推敲などに対する重点的な支出、出版助成、買取り、ホームページ作成などへの支出修正を伴うもの）が可能となるよう、9月には国際学部附属研究所長に要望書を提出し、大学当局の判断を仰いだ（その結果は下記「下半期報告書」に記載）。

これらと並行して、コロナ禍においても可能な活動として、第一には、引き続き文献調査を行っている。サウンドスケープに関する分野は文献自体の量がまだ多いとはいえませんが、サウンドスケープそのものだけでなく、文化史、社会史、文明論など、関連諸分野の文献は予想以上に多数存在することが分かってきた。

第二に、『国際学研究』へサウンドスケープに関する研究ノートを投稿するべく、文献の渉猟と執筆を進めた。また、そのために、日本フィルハーモニー交響楽団団員のA氏、藝大フィル元ヴィオラ奏者のB氏ら、演奏家へのインタビューを行い、演奏実践におけるサウンドスケープ・イメージの役割について立体的な、きわめて有益な知見を得た。なお、イベントとしては感染拡大防止のために中止を余儀なくされた4月のコンサートシリーズに関しても、演奏家へのインタビューを行った。

下半期

下半期においては、「政治と音楽」研究会において計画されている書籍の刊行に向けて、準

備作業を開始した。これは、上記の要望書に対して、コロナ禍という状況に鑑み、一定の条件のもとで、出版助成に対しての予算執行が許可されたため、書籍の刊行に向けた作業に活動を集約することができるようになったことが大きい。他方で、上記で予定していた代表研究者による『国際学研究』への投稿予定論文は、この書籍プロジェクトの一環として扱うこととした。

具体的には、下記のように「政治と音楽」研究会を開催した。書籍のチャプターの主要な執筆者が全員何らかの報告を行い、長時間にわたる質疑応答ディスカッションのセッションを設けたことにより、刊行予定の本の内容を詰めることができ、内容の相互の関連性や一貫性を飛躍的に高めることができた。なお、すべてズームによるオンライン開催である。各回の報告者の報告題名は概要的なものである。毎回、「政治と音楽」研究会のメンバーのみならず、関連分野の第一線の研究者や大学院生がディスカッションに参加したことにより、議論にさらに広がりがあったことも重要である。

- ・ 2020年11月8日（日）
 福田義昭（大阪大学）「アラブの国歌とアイデンティティ」
 半澤朝彦（明治学院大学）「政治と音楽」書籍の刊行計画について
- ・ 2020年12月12日（土）
 芝崎厚土（駒沢大学）「音楽を授業で使用することについて」
 佐藤壮広（明治学院大学等非常勤講師）「音楽を使用したワークショップ」
- ・ 2021年1月11日（月・祝）
 大中真（桜美林大学）「エストニアの合唱祭」
 山本尚志（拓殖大学非常勤講師）「在日ユダヤ人音楽家と戦時下日本のユダヤ人政策」
- ・ 2021年2月23日（火・祝）
 等松春夫（防衛大学校）「イギリス音楽と帝国、ナショナリズム」
 細田晴子（日本大学）「佐渡の＜鼓童＞グローバル化とローカル化」
 五野井郁夫（高千穂大学）「グローバル・ジャスティス運動など」
- ・ 2021年3月6日（土）
 辻田真佐憲（近現代史研究家）「戦前の音楽産業と軍歌」
 齋藤義臣（京都大学）「ジャズと色彩について」
 前田幸男（創価大学）「戦争ゲームとアメリカ軍のリクルートを中心に」
 芝崎祐典（青山学院大学非常勤講師など）「ドイツにおける政治と音楽」

上記のような毎月の研究会の積み重ねの結果、必要な修正や問題意識の発展などを経て、年度末までに以下のような目次案を、出版社に提出することができた。

- まえがき（序章）：半澤朝彦
- 〈第1部〉政治変動と音・音楽
- 福田 宏：社会主義時代におけるチェコスロヴァキアのロック
- 大中 真：バルト三国の合唱祭
- 池内 恵：アラブの春と音楽◎比政学会ペーパー：「革命象徴の篡奪と権威主義体制の再構築」
- 〈第2部〉支配と抵抗の音・音楽
- 芝崎 祐典：音楽と美術（US占領政策における違い）
- 齋藤 嘉臣：音楽と「色」（冷戦期アメリカのジャズと「黒色」）
- 辻田真佐憲：軍国化の中での音楽産業と消費者
- 五野井郁夫：「セカンド・サマー・オブ・ラブ〜グローバル・ジャスティス運動へ」

〈第3部〉越境・侵入する音・音楽（表象・規範、身体、グローバル化）

等松 春夫：帝国の表象から国民国家の表象へ

福田 義昭：アラブ地域の国歌について

山本 尚志：戦時下日本の対ユダヤ人政策と在日ユダヤ系音楽家

細田 晴子：グローバルとローカル：佐渡から見る、ソフトパワーとしての「鼓童」

前田 幸男：軍産エンタメ複合体 ※政治学会ペーパーを改変補筆

〈第4部〉音・音楽で世界を読み解く

佐藤 壮広：表現ワークショップからみえる政治社会状況

芝崎 厚士：音楽を用いたベダゴギー（環境運動、自衛隊に入ろう etc.）

半澤 朝彦「サウンドスケープとドン・キホーテの風車」（近代批判に対する省察）

上記の出版計画について、本プロジェクトの最終年度である2021年度にかけて、さらに構想を精緻化して充実度を高める予定である。コラムや補論の執筆など、さらに多くの研究者に執筆依頼を行う予定も提案されている。

なお、本共同研究のもっとも中心的なテーマである「サウンドスケープ」については、代表研究者が執筆するが、その趣旨は以下のようなものである。

サウンドスケープは、一九七〇年代以降、カナダの作曲家で理論家のR.マリー・シェーファーが提唱し広まった概念である。本論文では、とくに政治学や国際関係論、グローバルヒストリーなど社会科学的な視点からシェーファーの名著『世界の調律』を読み直し、彼の「歴史観」に対して批判的な検討を加える。『世界の調律』には、かなりはっきりした独特の「歴史観」が打ち出されている。サウンドスケープに関する研究は日本でも一定の蓄積があるが、シェーファーの歴史観自体を俎上に載せる問題意識はあまりない。シェーファー本人の意図とは別に、また日本特有の文脈もあって、サウンドスケープが「反西洋」「反近代」の言説に矮小化されている部分がある。論文では、シェーファーの歴史観とそれに連なる代表的な言説を整理した上で、作曲家や研究者だけでなく音楽の実践に不可欠な「演奏者」の視点からそれらの妥当性を論じる。